

第3回 知的障害者の住まい検討部会	
日 時	平成 27 年 7 月 29 日 (水)
開催場所	K R C ビル 大会議室
出席者	赤川委員、五浦委員、浮貝委員、神田委員、齋藤委員、志賀委員、宋倉委員、渡邊委員
欠席者	八島委員
開催形態	公開
議 題	1 議題 (1) 地域移行するための支援及び地域生活を継続するための支援について (2) その他
議 事	<p style="text-align: center;">— のぞみの園で受け入れた事例の紹介 —</p> <p>【主な議論】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本検討部会は住まいに係る検討会ではあるが、どの事例を通して学校が終了した後に、日中の活動場所が無くなって（支えきれなくなって）いる。日中の活動場所がどのように変わっていくのかということも大きな課題だと思う。</li> <li>・日中活動との連携は不可欠である。夜と日中で共通した支援がないと、うまくいく感じがしない。共通の言語はやはり必要だと感じる。ここに、横浜の行動障害のスタンダードを作っていくかといけなのではないか。</li> <li>・のぞみの園では、現在の役割を担うためのスキルアップ策として、専門家の方によるコンサルティングをお願いし、日中活動の組み立てから開始した。日中がないと住まいがなかなか確保できないという現状を踏まえておく必要がある。</li> <li>・短期入所を転々とするということについて、現場の職員として実感するのは、デイとナイトのつなぎ合わせが難しいということ。短期入所を何か所も利用しているということ自体が、安定を望むということが厳しいのではないか。安定した場が確保されないと、それらに伴う支援技術も定着しない。</li> <li>・行動障害が2次障害だと考えると、早い時期の療育で環境アプローチができれば変わるということも考えられる。学校卒業後ということもあるが、そのさらに前から住みやすい、過ごしやすい環境を設定していくことが必要なのではないか。</li> <li>・日中の支援が担う役割は大きいと思う。特別支援学校の卒業生が増えてきており、また、そういった中でも発達障害や行動障害の方の割合が一定いるという話がある。やはり昼間が安定しないと、住まいも安定しない。</li> <li>・経営的には厳しいかもしれないが、鶴見区のある施設で、スーパーバイザーを呼んで、自閉症に特化した対応を始めている。（支援内容の）質がそろって、個人差がなくなってきて落ち着いてきた現状がある。</li> <li>・私達はGHに通っている方の状況を観察している。私達の考え方からでは</li> </ul>

なく、本人の状況からエビデンスを出していくことを中心に考えている。そして、それをしっかりと日中の職員へ伝えていくことを進めている。GHや日中と分けて、どこが課題なのかということではなく、その人の生活をトータルで見て、どこに課題があるのかということを中心にきちんと見極めることが必要なのではないか。その人は変わらないので、共通言語と共通理解を持つ必要があると思う。

— 五浦委員から資料を説明 —

【主な議論】

・短期入所転々としていると、支援方向性が法人の色によって変わってしまうので、利用や目的をはっきりさせたミドルステイやロングステイが必要になってくるのではないかと。

・箱物の整備があったとしても、支援者が支援手法を持っていないと機能しない。そういった意味では、2次相談機関としても、その役割を担っていければ良いと思うが、現状は良い意味でもカラーが違うため難しい面がある。

・ミドルステイで効果を求めるのは、学齢期ではないと難しいのではないかと。あまり固定化していない時期に療育型として進めて行くことは必要かもしれない。

・ミドル・ショートステイは、入所施設の空きが無い中で、どう生活を立て直していくかということが前提になっていると思う。ある程度、猶予期間をもらって、その人が戻れる場所を確保していかなくてはならないということも支援していく中では必要になってくると思う。それをミドル・ショートステイが担うのかどうかという問題はあるが、そういった地域の中で受け止めるだけの猶予期間を設けないと、生活が破たんした人の生活を立て直すということが難しいのではないかと。

・個人的な考えだが、そもそも入所施設は何十年も住むところではないと思う。強度行動障害が固着化してしまい、通常的生活の中での改善が厳しい方が入所するところではないかと。よって、基本的には数年単位で、症状が改善したら入所施設から出て行くことが必要だと思う。

・何十年も入所施設での生活をしている人がいるので、今まさに思春期で行動障害が固着化しそうな人が入所施設に入れず、ショートステイなりを利用しているのだと思う。

・現に入所施設に入っている人は、安定しているので、家族にとっても地域移行への思いは低く、そこに手を加えることは、かなり難しいのではないかと。しかし、一方で、生活が破たんして困っている人を受け止める仕組みも無くて困っているので、まずは、ここから整理していくことで、アプローチの仕方が変わってくるのではないかと。

・とにかく本人の生活を知って、それが一人暮らしなのかGHなのか、本人

の生活がどんなものかを見極める期間（5年など）に決めてしまうという考えもありだと思う。少し勝手ではあるが、そのように本人にあった環境を評価する期間としないと、入所側として意識が向かないのではないか。また、家族としてもそういう機能だと思って利用することができないのではないか。

・その期間が来たら地域移行をしなくてはいけないということではなく、その期間が来ることで、「本人の生活を切り切れていない」など、行動障害のある方への支援のノウハウが必要になってくるのではないかということである。

— 赤川委員から資料について説明 —

【主な議論】

・同一法人同士での地域移行は難しくないという考えには驚いた。入所施設側としては、正直なところ難しいと思っている。ただ、入所施設の職員として、地域の実情や暮らしを知らないということもあるかもしれないし、視線がそこに向いていないという現状があるのかもしれない。

・GH側としては、受け入れる時に、在宅から打診を受けるのか、入所施設から打診を受けるのかについては、それほど意識をしていないし、同一法人かどうかは意識していないと思う。

・区役所のケースワーカーは入所施設につなぐと、そこで切れてしまうため、例えば、GHに空きが出たという情報などが入所施設に届かないという現状があると思う。そういう中では、他の法人に相談しても良いということが、こういったアンケートから分かったのでありがたい。

・平成25年度に障害福祉施設の実態調査を行ったと思うが、本当にGHや入所施設が良いのか、何でそう思うのかなど、もう少し細かい本人の状況を聞けるような調査を、今後の基礎データとして扱うために、行ってほしい。

・以前アンケートを取ったところ、これまでと異なり、2年間で自立した生活の仕組みが必要という声や、体験的なところが欲しいという声が多くなってきている。自閉症の中でもとりわけ、高機能の人が増えてきたことが背景にあると思う。そのような現状を踏まえると、入所施設から地域移行できていない人やGHを古くから利用している人に対する再調査だけでは、代り映えしない回答になるのではないか。

— 次回は8月31日の開催であることを確認し、散会 —